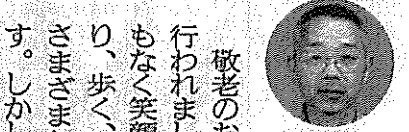
高齢者の潜在能力を生かす

所感雑感



元高校教員　三谷（みたに）　隆彦（たかひこ）

敬老のお祝いがあちこちで行われました。人間は生後間もなく笑顔を見せるようになり、歩く、走る、木登りなどさまざまな能力が発達します。しかし高齢化に伴い逆に後退します。木に登れなくなり、走るのも遅くなり、歩行困難になります。ではどうすればよいでしょうか。

今年の夏スウェーデン、デンマークへ行きました。旅行目的は認知症高齢者の介護を学ぶためです。介護付き高齢者住宅を5カ所ほど見学しました。第一印象は明るい表情です。さらに両国で強く感じたのは潜在能力の活用です。歩ける人には歩かせます。両手で平行棒をつかまえて移動する、お花畑を歩くなど多様な準備をします。強制するのではなく、運動するかしないか、何をするか自己決定を尊重します。また五感についても若い時は敏感であるが、歳をとると鈍くなります。職員が鳥、花、風景などを撮影して高齢者の好みに応じて上映します。そばに音響装置もあります。映像に合わせてクラシック、歌劇など選曲できます。どんな香料が好まれるか研究中です。視聴嗅覚を組み合わせて潜在的な感覚を呼び起します。

スウェーデンのヨーテボリでは入居者360人、職員もほぼ同数の高齢者住宅を訪ねて、半日過ごしました。北欧では母国語の他に英語も話します。私たちが訪ねたグループホームは重度の認知症、統合失調症など8人が暮らしています。個室、食堂、廊下いずれも広々として、車椅子で動きやすくなっています。8人のうち1人は談話室でお話しますが、他は自室に閉じこもりです。日本から持参した風船で遊びました。昼食は食堂で全員一緒にします。皆さんガツガツ食べて、さっと自室へ帰るとのことでしたが、この日は珍しく日本人としゃべりながら1時間ほどかけてゆっくり食事を楽しみました。車椅子の男性はほおあごの白髪を膝まで伸ばしています。その髭をほめると、彼は片手であご髭をおさえもう一方の匙を握った拳を上げて大喜びです。喜びで開けた口の中に歯は一本もありません。

80歳くらいの女性は無表情で怖そうな眼つきです。認知症の一つである、実在しない物が見える幻視に襲われるレビー小体型です。ご主人が昼食時に来て隣の席で食べます。彼は横浜に滞在したことがあり、東京や富士山の話をしました。御夫妻の娘2人は近くに住み孫も会いに来ます。息子はスペインから電話をかけてきます。週2ないし3回は子どもたちと連絡を取ります。敬老の日が日常的にあります。スウェーデン語で「タクソミュッケ（ありがとう）」との私の発音が滑稽だったのか、無表情の女性が全身を揺すって大笑いしました。

夕方は入居者の皆さんと生演奏でダンスです。ぶどう酒を「スコール（乾杯）」と言って飲み、上機嫌のお年寄りもいます。車椅子の高齢者も音楽に合わせて踊ります。和服姿の日本男性の手を取って踊っている女性は足取りも軽く満面笑みが溢れています。冷静に見ますと、介護の基本に人間尊重の精神があるのではなかろうかと考えさせられました。

日本でも外国でも70歳を超えると1割くらいの者が認知症を患い、年齢が高くなるとさらに割合が増えます。私も認知症にかかりますと施設のお世話になります。施設で暮らし始めますと、スウェーデンではこのようにする、デンマークではと注文を付けたくなります。けれども認知症は新しいことを忘れますので、北欧へ行ったことも思い出せないでしょう。

（高知市神田）